

鉄心斎文庫所蔵

伊勢物語

図録

【第十七集】古写本の世界
中世末期から江戸時代にかけて



鉄心斎文庫所蔵

伊勢物語図録

【第十七集】古写本の世界――中世末期から江戸時代にかけて

◎発行日……………平成十一年十一月四日

◎発行者……………芦澤美佐子

◎発行所……………鉄心斎文庫伊勢物語文華館

神奈川県小田原市新屋三一二番地250
0856

電話〓〇四六五―三七―三六三〇

東京連絡所

東京都品川区南品川六十五―三―140
0004

電話〓〇三―三四七四―〇〇〇三

◎造本……………杉浦康平＋佐藤篤司＋副田和泉子

◎制作……………エヌ・ディ工房（土井弘）

◎印刷……………日本写真印刷株式会社

◎定価……………二〇〇〇円

鉄心斎文庫所蔵

伊勢物語図録

【第十七集】古亭太

江苏工业学院图书馆
藏书章

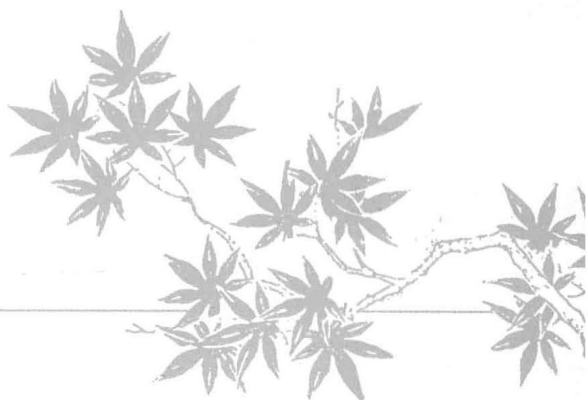
世末期から江戸時代にかけて
鉄心斎文庫 伊勢物語文華館



ごあいさつ……………	芦澤美佐子……………	4
流浪する貴族たち……………	山本登朗……………	6

一……………	天 本奥書本……………	8
二……………	根源本第二系統奥書本……………	10
三……………	伝飛鳥井雅親筆天福本……………	12
四……………	伝西園寺実遠筆本……………	14
五……………	伝仁和寺尊海筆小本……………	16
六……………	梅允筆本……………	18
七……………	紅梅文庫旧蔵無奥書本……………	20
八……………	無奥書本……………	22

九……………	無奥書本……………	24
十……………	承久三年本……………	26
十一……………	伝三条西実枝筆本……………	28
十二……………	慶長十七年伝飛鳥井頼孝筆武田本……………	30
十三……………	楠草字筆袖珍本……………	32
十四……………	伝中和門院藤原前子筆本……………	34
十五……………	伝円満院円悟筆本……………	36
十六……………	寛文三年筆本……………	38
十七……………	伝冷泉為清筆天福本……………	40
十八……………	村井氏旧蔵本……………	42
十九……………	無奥書本……………	44





二十	無奥書本	46
二十一	無奥書枿型本	48
二十二	根源本第二系統奥書本	50
二十三	根源本第二系統奥書本	52
二十四	伝松永貞徳所持本	54
二十五	武田本奥書本	56
二十六	長禄二年本の転写本	58
二十七	無奥書本	60
二十八	無奥書本	62
二十九	元禄四年筆本	64
三十	無奥書本	66

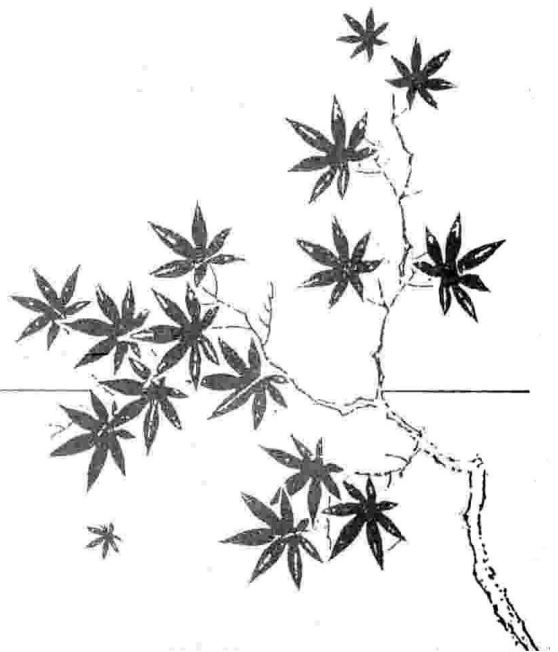
三十一	享保十九年筆本	68
三十二	妙性尼筆本	70
三十三	天福本奥書本	72
三十四	無奥書本	74
三十五	伝松浦家旧蔵無奥書本	76
三十六	無奥書本	78
三十七	無奥書本	80
三十八	無奥書本	82
三十九	無奥書本	84
四十	澄川正弥旧蔵本	86
四十一	掛軸伝藤原定家筆	88



●このたびは、江戸時代の本文だけの写本を展示いたしました。伊勢物語に限ったことではないかもしれませんが、私共の蔵書は、江戸時代のもものが半分以上をしめております。鎌倉時代から数えて約八百年近い時を過しているのですから、天災・人災（いくさ）の多かつた中を、生き残ってきたということだけで、たいへん貴重なことだと思います。戦国時代が終って、やっと世の中が安定してきたものの、多く残っているのは当然のことなのでしょう。

●平安朝時代の貴族階級の人々は、みな書を美しく上手に書かれたのでしょうが、残っているものは極く僅かしかありません。私共の文庫にも平安朝のものはありませんが、鎌倉時代の写本にしても、室町時代の写本にしてもそれぞれ時代の特徴があります。また江戸時代の書は、おもしろくないなどと云われてきましたが、決して捨てたものではないと思います。学者は自分のために書き、また弟子は、それを写させて頂いて自分のものとしてきました。もちろん人に頼まれて書くことも、かなりあったと思います。中には全く似ないものもありますが、師弟の子、親子の字で、よく似ているものがあります。師を尊敬し、親を敬っていると似てくるものなのでしょう。

●料紙の美しいもの、装丁の立派なものなど色々です。うす墨であまり上手な書ではないなと思いましたが、それなりに書いた人は楽しんでいるように見うけられます。どうぞ色々な角度からご覧いただいて、教えて頂ければ幸いです。





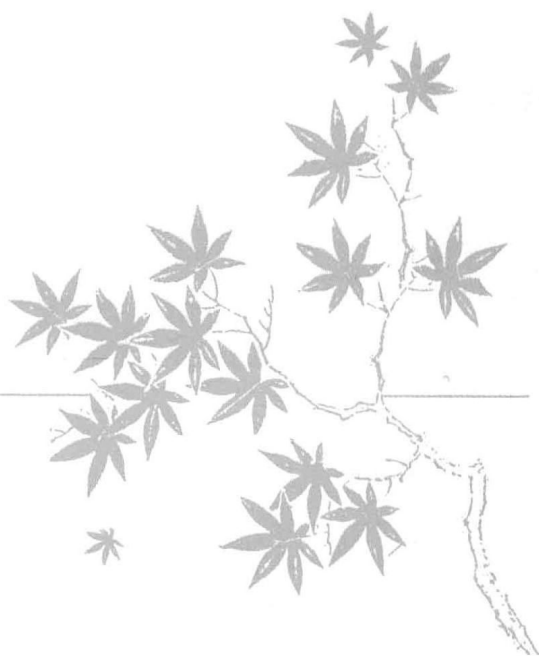
流浪する貴族たち

山本登朗

●昨年、京都文化博物館と神奈川県立歴史博物館で開催された展覧会「越前朝倉氏・一乗谷——眠りからさめた戦国の城下町——」に、さまざまな発掘出土品の一つとして、天文十九年（一五五〇）に一乗谷の地で没した、当時を代表する学者・清原宣賢のよかたの墓石が陳列されていた。唯一神道で有名な吉田兼俱かねとの三男で、儒学の家である清原家を継いだ宣賢は、『中庸』『孝経』等の講義のために数度にわたってこの地を訪れており、結局一乗谷で最期を迎えることになったわけだが、彼が何度もここを訪れたのは、単に講釈の依頼があつただけではなかつたように思われる。当時、都を去つて地方に向かう貴族は多く、その中のかなりの人々が、そのまま地方に骨を埋めているからである。

●宣賢の死の前年・天文十八年（一五四九）には、冷泉家の当主・為和が駿河で没している。井上宗雄氏『中世歌壇史の研究・室町後期』等によれば、生活の困窮から逃れるため所領があつた駿河に下向し、今川氏の庇護を受けていたという。現在出版されている『伊勢物語』の多くは宮内庁書陵部所蔵の冷泉為和筆本を底本にしているが、同書は当時今川氏が所有していた天福本『伊勢物語』の定家自筆の原本を、駿河の地で、為和が忠実に臨写したものである。為和の死の三年後・天文二十一年（一五五二）には、二条家流（宗祇流）の歌學を伝えていた三条西家の実枝さねえだ（↓

〔十一〕）が入れ替わるように駿河に下り、永禄十二年（一五六九）の上洛まで滞在を続けた。為和が写した天福本『伊勢物語』の定家自筆原本は、実はもともと、実枝の祖父の実隆から今川氏に譲ら



れたものであった。実枝は駿河で、はたしてこの『伊勢物語』を見たのだろうか。ちなみに、三条西家とは別系(堯恵流)の歌学を学び、伊勢物語についても伝授を受けた特異な公家歌人・橋本公夏(↓第十集[八・九])もまた、その一生の多くの時期を播磨で過ごし、天文七年(一五三八)に同地で没している。清水谷家を継いだ公松(↓[六])は、その公夏の子である。

●このように多くの貴族が都を離れた、その根本的な理由は、言うまでもないことだが、応仁の乱以後の都の荒廃と、収入源である荘園が戦国時代の混乱によって失われたことにあった。都は荒れ、貴族たちは困窮していたのである。清原宣賢が一乗谷で生涯を終えた、その背後にも、おそらくは同様の事情があつたかと推測される。多くの有力な戦国大名は、そんな貴族たちを歓迎し、手厚く遇した。彼等にとつて、貴族たちは彼等に都の文化を伝えてくれる、いわば家庭教師のような存在であつた。現在「小京都」と呼ばれている多くの地方都市の文化的基盤は、この時期に、このようにして形成されたのである。

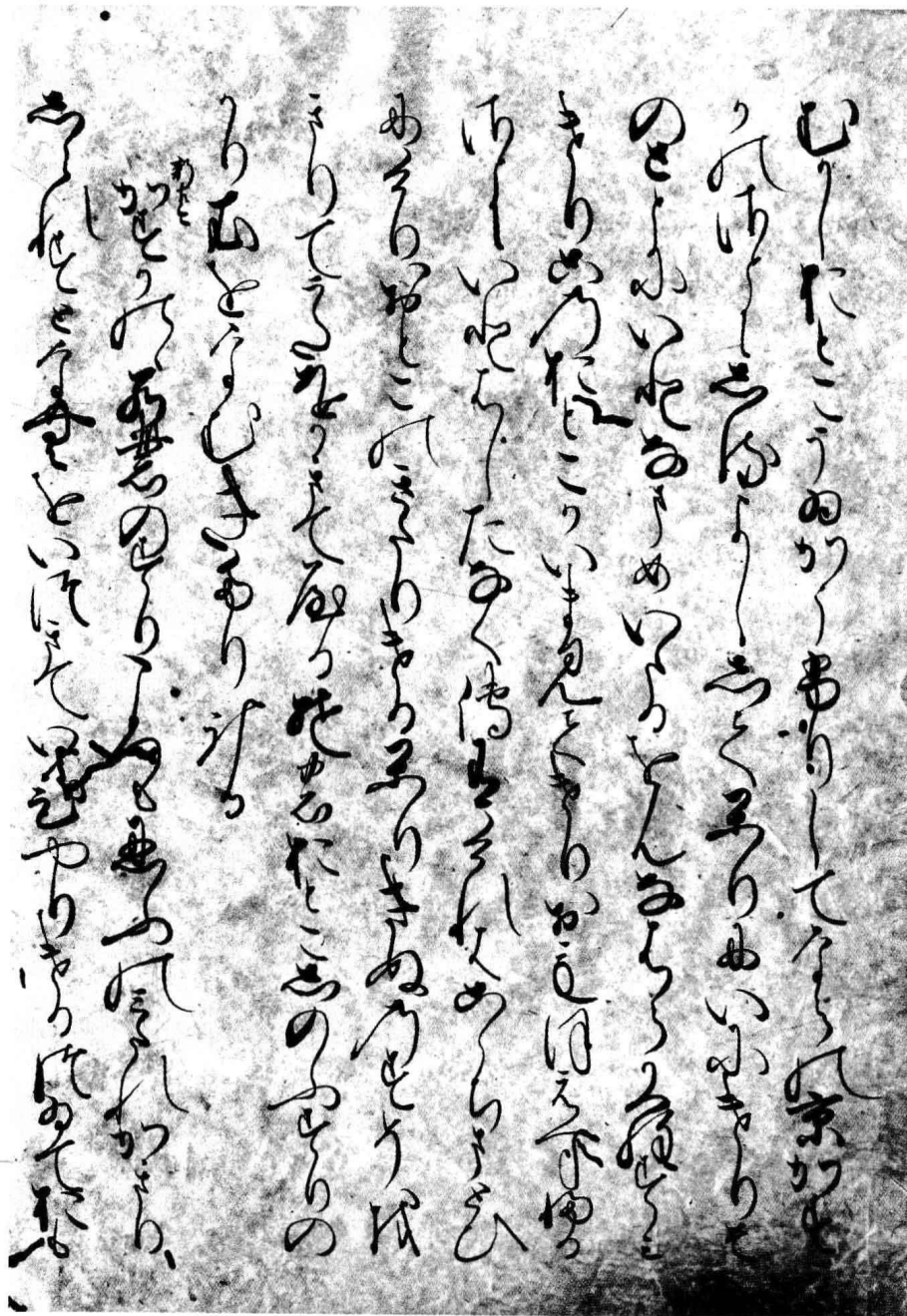
●清原宣賢の学識は儒学以外にも広く、三条西実隆の講釈を聞いてまとめた注釈書『伊勢物語惟清抄』は広く読まれて特に著名である。一乗谷の遺跡からは『庭訓往来』の断簡が奇跡的に出土しているが、宗祇をはじめ多くの都びとが何度も訪れたこの町の土中には、燃え尽き朽ち果てた無数の『伊勢物語』が今も埋まっているはずである。現存する室町時代の写本が、貴族たちのきびしい現実の中から生み出され、幸いにも朽ち果てることなく現代に伝えられた貴重なかたみであることを忘れてはならない。

(光華女子大学教授)

一……天福本奥書本

列帖装一帖。縦二四・三厘、横一六・九厘。茶色地
金襴表紙の左上に題箋を貼り、「伊勢物語」と
外題を記す。見返しは金砂子散らし。料紙は烏

の子紙で、墨付き六二丁、遊紙二丁。天福本の勘
物等を有するほか、朱筆と墨筆で若干の注記
が書き入れられている。巻末には、天福本の卷
末勘物の後、「本云」として天福本の奥書が記
されている。



のりむいふめあやめじにぬめあやめし
いふりえめとらふり

鎌倉幕府貞観六年八月廿一日亥下 奏書

ひげ河川のついでにふりききしてふり
きり四十九家の家とふりしり日中ゆり

けいふさし 貞観七年
けいふさし 貞観七年
けいふさし 貞観七年

けいふさし 貞観七年
けいふさし 貞観七年
けいふさし 貞観七年

けいふさし 貞観七年
けいふさし 貞観七年
けいふさし 貞観七年

けいふさし 貞観七年
けいふさし 貞観七年
けいふさし 貞観七年

けいふさし 貞観七年
けいふさし 貞観七年
けいふさし 貞観七年

けいふさし 貞観七年
けいふさし 貞観七年
けいふさし 貞観七年

けいふさし 貞観七年
けいふさし 貞観七年
けいふさし 貞観七年

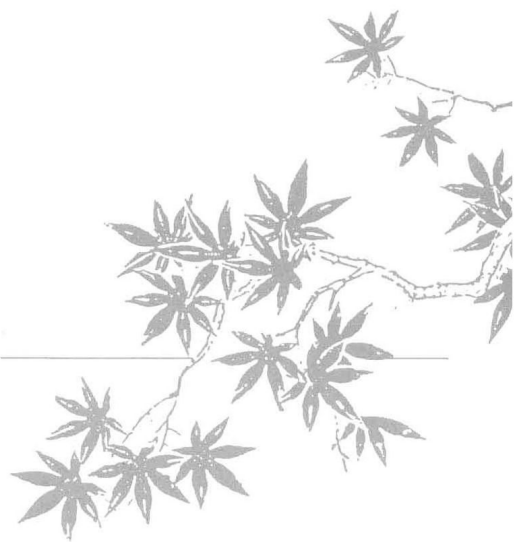
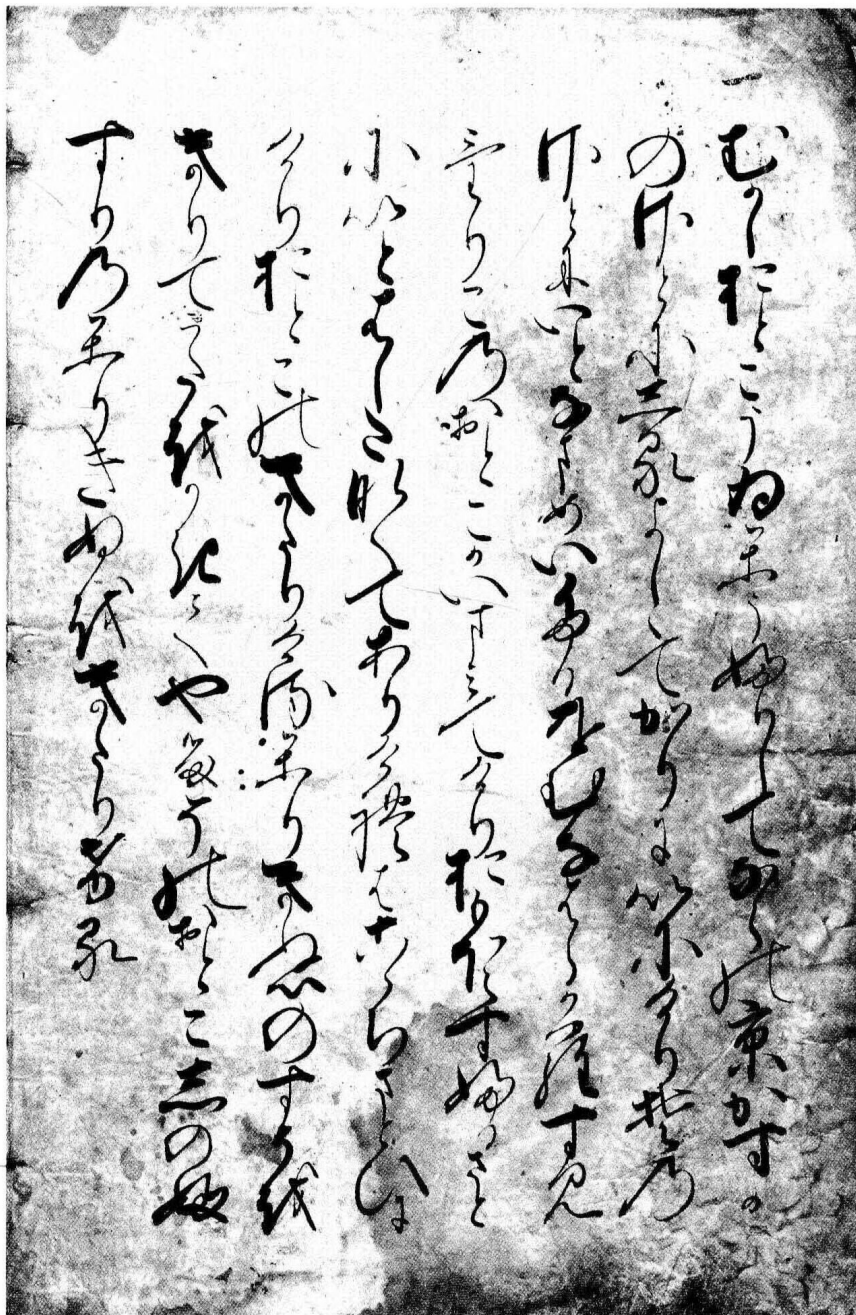
けいふさし 貞観七年
けいふさし 貞観七年
けいふさし 貞観七年

天福二年四月廿五日
旨目建日風雪之中
遊世書信授護愛
之孫也 同廿二日役

二……………根源本第二系統奥書本

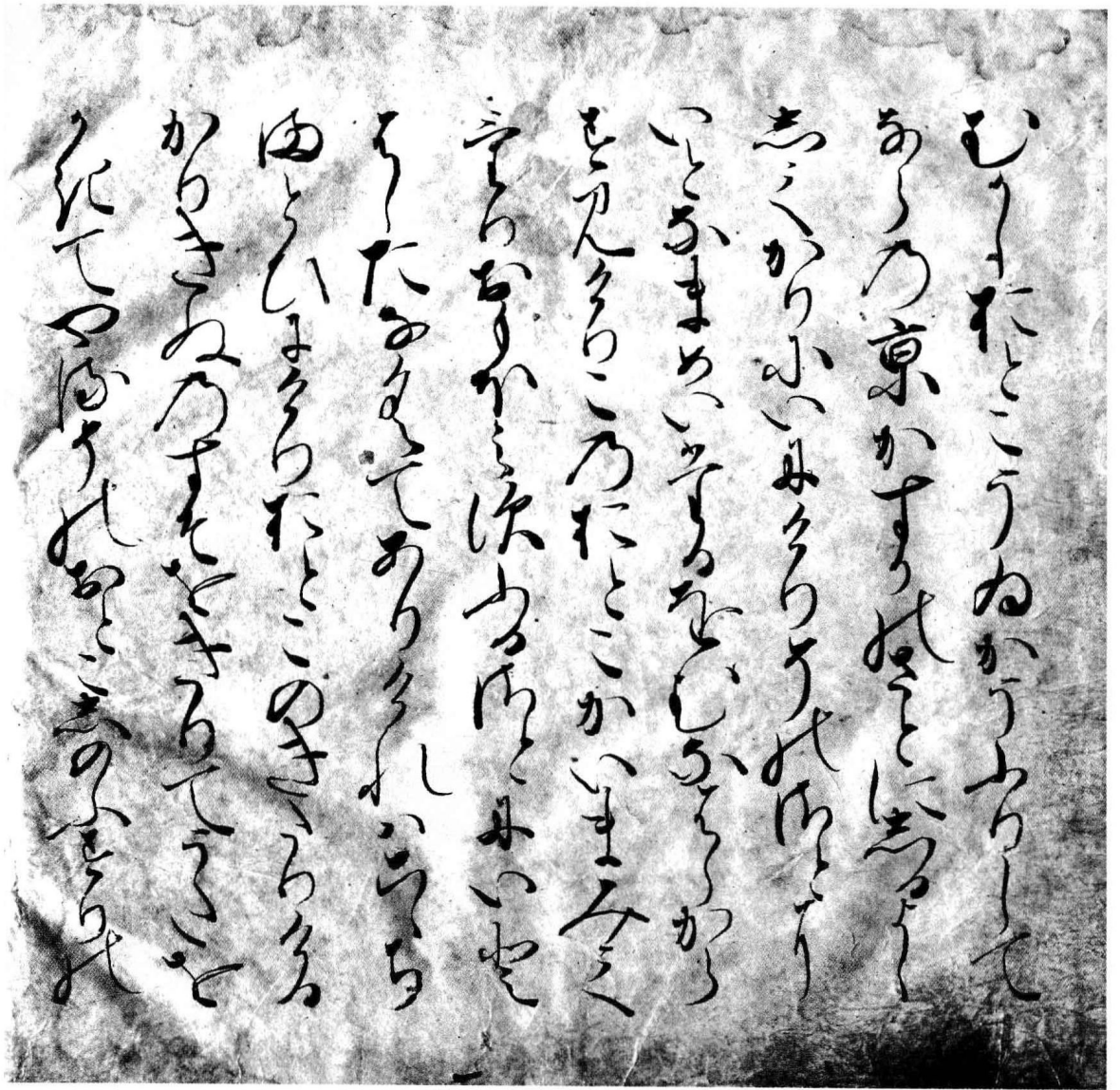
列帖装一帖。縦二六・〇厘、横一七・〇厘。補修の際に補われた紺地無地表紙中央の題箋に「伊勢物語」と外題が記されているが、白紙の見返しも含め、すべて新しく補われたものである。料紙は楮

紙で、墨付き八七丁、遊紙はない。補修されるまで、かなり損傷を受けた状態であったと見え、十四段途中から十六段途中までの、ほぼ一丁分が欠落している。巻末に根源本第二系統の奥書を有する。



なまのこゝろ

或說云爲將便下向伊勢仍在此名之爲
又雜信始則載南京春日之詞次注西對
月之思留土山之雪武藏野之煙几非伊
勢國事多以爲物語之肝心仍而說有
春番古事上作言可也



三……伝飛鳥井雅親筆天福本

列帖装一帖。縦一六・六厘、横一七・四厘の枡型本。緑地小菊つなぎ文様緞子表紙。題箋・外題はない。見返しはなく、第一丁が表紙裏に貼り付けられている。料紙は鳥の子紙で、墨付き八六丁、遊紙五丁。天福本の勅物等と奥書を有する。極札などはないが、納められていた塗箱に金時絵で「飛鳥井雅親御筆」等と記されている。飛鳥井雅親は、室町時代中期の代表的歌人。正二位権大納言に至り、延徳二年（一四九〇）十二月二十二日、七十五歳で没した。（↓第一集^三、第三集^四）



かゝるものゝやうなものをいふて
ていふうゝ様なものをいふ
にがたのものをいふ
うたへていふものをいふ
いふうゝものをいふ
うたへていふものをいふ
いふうゝものをいふ
いふうゝものをいふ

葉いふものをいふ
葉いふものをいふ
葉いふものをいふ
葉いふものをいふ
葉いふものをいふ
葉いふものをいふ
葉いふものをいふ
葉いふものをいふ

いふうゝものをいふ
いふうゝものをいふ
いふうゝものをいふ
いふうゝものをいふ
いふうゝものをいふ
いふうゝものをいふ
いふうゝものをいふ
いふうゝものをいふ

天福二年正月廿日
桑門之旨目連日風雪之中
廿書属為授館愛之林色同
廿二校了

じりやうと申すやうにてなれ
まゝすれはふとていふ
なりとていふとていふとていふ
すゝすゝすゝすゝすゝすゝ
ぢりやうと申すやうにてなれ
まゝすれはふとていふ
なりとていふとていふとていふ
すゝすゝすゝすゝすゝすゝ

ときりやう

ひすれはふとていふ

なりとていふとていふ

すゝすゝすゝすゝすゝすゝ

ぢりやうと申すやうにてなれ

まゝすれはふとていふ

なりとていふとていふ

すゝすゝすゝすゝすゝすゝ

四……伝西園寺実遠筆本

列帖装一帖。縦二六・七厘、横一八・〇厘。表紙は紺地小菊散らし文様の金襴。題箋・外題はない。見返しは金地布目。料紙は鳥の子紙で、墨付き八二丁、遊紙二丁。奥書はない。納められている桐箱の蓋に金字で「西園寺左大臣実遠公筆」等と記されている。西園寺実遠は、文明十五年（一四八三）に左大臣に任ぜられ、明応四年（一四九五）十二月に六十二歳で没した。



てあやふさふさとしたまゝに
なまじりたるやうに
いふやうな
うゝやうな
右のやうな
いふやうな
うゝやうな
いふやうな

うゝやうな
いふやうな
うゝやうな
いふやうな
うゝやうな
いふやうな
うゝやうな
いふやうな

うゝやうな
いふやうな
うゝやうな
いふやうな

うゝやうな
いふやうな
うゝやうな
いふやうな

うゝやうな
いふやうな
うゝやうな
いふやうな

うゝやうな
いふやうな
うゝやうな
いふやうな